

# 下商物語

## 憧れつづけた下商

寄稿 富田 義弘氏

戦争が終わって、ようやく日本に平和が訪れたというのに五年も経たないうちに海の方こうで朝鮮戦争が始まります。その二ヶ月前の昭和25年4月、桜花爛漫の校庭に一歩を記し、下関商高に入学しました。

私にとっては十年近くもの水い歳月を憧れつづけた学校です。見上げれば校舎と講堂に上つらえられたマーキユリーが真つ先に目に飛び込んで思わず涙が出そうになり、ぐつと我慢したことを覚えています。そして、正面玄関寄寄せの大きなギリシャ建築様式の石柱(元教諭岸勤氏のスケッチ参照)にそつと手を触れ、「ああ、これが下商なんだ」と心の奥で叫ぶと再び胸が熱くなりました。

「十年近く・・・」というのにはワケがあるのです。私が幼稚園児のころ、近所のお兄さんたちの中では下商生が一番カッコ良く、いずれも利発そうで、やさしく親切でした。学生帽に輝く校章、肩からさげたカバン水兵の白脚絆などは他校の生徒よりは一段と光って

見えたものです。「大きくなったら下関商業」と私の夢は早くも決まっています。

昭和16年4月に国民学校と名を変えた旧小学校に入学、急速に激しさを増す戦局に翻弄されながら軍事教練や勤労奉仕に明け暮れる毎日が続きます。そんな中でも時折り、生徒動員から帰って来る下商のお兄さんたちに軍需工場などの話を聞かせてもらい、「今にボクも」と胸に誓ったものでした。

日本が敗戦を迎えた翌年、私は六年生になり、「来年は下商に入れる」と秘かに喜ぶ日々が続きました。その年の秋、担任の先生が「お前たちは就職や進学のことをいろいろ考えたり父兄と話し合ったりしているだろうが、来年からは新しい制度の中学に入って全員三年間勉強することになる」と言ったので、皆んな一斉に驚きの声をあげました。

更にその翌年4月、戦時教育の国民学校は僅か六年間で小学校の名称に戻り、6・3制と呼ばれる新制中学が発足したので、私の下

商受験は三年先に延びてしまったのです。戦後の新教育は年を追うごとに上級教育へと進められ、高等学校、大学、大学院などと改組あるいは開校させて、6・3・3・4・2制を樹立、これによって下関商業も下関商高となりました。中学生の私たちの間で、ほとぼつ就職や進学の話がささやかれ始めたころでした。

私が住む彦島は下関市内きつての重工業地帯で、三菱、林業などの造船所や東洋高圧、三井製煉、日東硫黄、日新耐火(いずれも当時の企業名)が戦後の復興を目標して景気よく操業、進学よりも就職組に人気があつてのんびりムードが漂っていました。それでも時折、教師は「高校から大学に進む者は豊浦、銀行や官公庁、自営を志す者は下商を選べ」と事あるごとに言つたものです。高校への進学は「豊浦と下商が双壁」だと殆ど

どの人が思つていたからです。恋い焦がれた下商に入学した昭和25年、校長の上田強先生は朝礼やあらゆる武典のたびに、校歴や伝統、校風を力説、徹底的に母校愛を植えつけられました。そして情報網を張りめぐらして著名人を下商講堂に招き多くの講演を開催。私たちは授業で得られぬ幅広い知識を得ることが出来ました。

また、その年は下商に柔道部が復活し軟式野球部、ペン書道部、新聞部、郵便友の会、映画同好会などが次々に発足、「新しきエネルギー」と言つて下さつたのが時の校長・上田強先生でした。

執筆者紹介  
富田 義弘  
昭和二八年本校卒  
郷土史家(下関の方言等)  
下関野球部百年史編集  
本校同窓会理事

